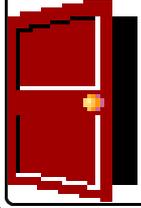


《読書活動の楽しさと大切さを伝えたくて》



読書活動への扉を開く！

桑村小学校 令和4年5月2日 文責 渡邊

今回も、榎本博明著『読書をする子は〇〇がすごい』（日本経済新聞出版本部2021年5月）を参考に、「読書の効果」について考えてみたいと思います。

文部科学省による2019年度の調査データをみると、教育機関における生徒の暴力行為の発生件数は7万8787件である。(中略)これまでは中学校が飛び抜けて多かったのだが、このところ小学校の件数が急増し続けており、今では小学校の発生件数が断トツに多くなっている。(中略)このところの小学校における暴力事件の急増には、厳しさを欠いた子育てによる自己コントロール力の欠如に加えて、読解力の乏しさも関係しているに違いない。

それは2通りの形で関係していると考えられる。まず第1に、友人関係の文脈において、読解力不足によるコミュニケーションのすれ違いが起こりやすいということである。読解力が乏しいと、相手の言葉の意味を正確に読み取ることができず、お互いに相手のことをわけが分からないと思ったり、自分勝手なことばかり言ってくると曲解したりして、ちょっとしたことがきっかけでトラブルに発展しやすい。これには、読解力と相互作用しながら発達していく語彙力の不足も関係する。語彙力が乏しいと、文章や人の言葉を適切に読解できないだけでなく、自分の思っていることを的確に表現することができない。何でも「やばい」とか「エモい」とかですませていると、微妙なニュアンスを伝えるための言葉が頭の中の辞書に蓄積されず、自己表現がうまくできない。

第2に、授業の場で読解力不足によるイライラが生じやすいということがある。教科書を読んでも授業中の教師の解説を聴いてもよく分からないためイライラする。朝から午後まで、しかも毎日のようにそのような授業時間を過ごすのは、相当つらいに違いない。そのストレスによって攻撃的な気持ちになりやすい。

『読書をする子は〇〇がすごい』榎本博明著 日本経済新聞出版本部2021年5月より)

言葉を獲得し表現する力は、自然に身に付くことができるようで、実は学習することで身に付くことができるのです。自然に身に付くことのできる言語を榎本氏は、「生活言語」と呼び、学習によって獲得できる「学習言語」と使い分けています。

言葉を使ってものを考えるのであれば、頭の中に言葉を豊かに蓄積している人ほど緻密に考えることができるということになる。その際、言葉といっても、日常会話で使う言葉と学校の勉強をしたり本を読みながら人生について考えたりするときの言葉を区別する必要がある。

教科書を読んでも理解できない中高生や授業中の教員の解説を理解できない大学生を引き合いに出したが、そのような生徒や学生も日常会話は普通にこなしている。むしろ勉強ができる生徒・学生よりも流暢にしゃべっている者も少なくない。

発達心理学や認知心理学においては、言語を生活言語と学習言語に分け、言語発達を日常会話力と学習言語力に分けてとらえる。子供は、生後まもない頃から親などとのやりとりを通して生活言語を自然に身に付け、日常会話力を発達させていく。その後、読み書きができるようになるにつれて、思考の道具としての学習言語を発達させていく。学校の授業では、この思考の道具である学習言語力を使うことになる。

このように言語能力を日常会話に用いる生活言語能力と抽象的思考に用いる学習言

語能力に区別する視点はとても重要である。日本語を何不自由なくしゃべっていても勉強ができない子、知的活動が苦手な子がいくらでもいることから分かるように、知的活動をする際に大事なのは学習言語能力を磨くことである。それができないと、授業についていけず、ものごとを深く考えることができない子になってしまう。

普通にしゃべっているから言語能力は問題ないと思っていると、順調に発達しているのは生活言語能力だけで、学習言語能力は未熟なままということも十分あり得る。ぺらぺら饒舌にしゃべっているから大丈夫と安心していると、学校に行くようになってから授業についていけないということが起こることもある。『読書をする子は〇〇がすごい』榎本博明著 日本経済新聞出版本部2021年5月より)

幼稚園や保育所、こども園では、友達と会話を楽しんでいる子供たち。学校に入学し学習が始まると、各教科の学習では、徐々に抽象的な思考力が必要になってきます。そこで、学習言語が発達できていない子供たちは、教科書や教師の言葉の意味が分からず、授業内容が理解できなくなってしまう。

生活言語は自然に身に付いていくが、学習言語を身に付けるには、それなりの経験が必要となる。そこで問われるのは、どれだけ本を読んでいるかということである。

読書には、語彙力や読解力を発達させ、思考力や想像力を高めさせるという効用があるばかりではなく、根気強さを培うという効用もある。本を読む際には思考力や想像力を駆使しながら文章から具体的場면을想像力によって立ち上げたり、作者の言いたいことを論理的にたどるなど、かなり知的努力を必要とする。それを継続するのは根気を要する。

また、読書には、さまざまな立場や性格の登場人物に触れたり、これまで出会ったことのない価値観をもつ作者に触れたりすることで、いろんな人間の思いを想像することができるようになり、共感性が高まるといった効用もある。読書を通して多様な他者を理解できるようになる。このように読書には、語彙力や読解力のような認知能力を高めるという効用だけでなく、根気強さや共感性といった非認知能力を養うという効用もある。『読書をする子は〇〇がすごい』榎本博明著 日本経済新聞出版本部2021年5月より)

読書活動には、いろいろな効果がありますね。今回は、紙面が文章だけとなり読みずらかったのではないかと反省しています。また、感想をお寄せください。お待ちしております。連休の後半も、安全に楽しく過ごしてくださいね！

----- 切り取り線 -----

「読書活動の扉を開く」(5月2日号)を読んだの感想

()年()